研究としての部落解放運動

小森　龍邦

部落解放運動といえば、理論よりも実践・行動に重きをおくものと、世間では思われている。

しかし、この運動が1970年代から、2000年頃までにかけて、かなりの成功を収めたのは、やみくもに「行動あるのみ」といった態度ではなく、周到な理論武装をして、大衆行動を起こしたからである。

運動・行動と理論というものは密接不可分のものであることを十分に念頭においた上で、一度それを分解し、客観視（研究）する対象として、部落解放運動を取り上げるということが必要である。これが、本稿で「研究としての部落解放運動」というテーマとしたゆえんである。

そこで、まず理論というものを、この地球上に棲息する動物、つまり、動きまわる生き物の中で人間以外に持ち合わせているのだろうかと考えてみる。理論とは、いかにすれば目的を実現できるかという構図＝設計書（図）を、あらかじめ頭脳の中に描くということである。

部落解放運動を、いくら実践から切り離して客観的、理論的に見るといっても、それは、「実現したいもの」という運動的欲求と関係なしに分析できるものではない。

猿とかカラスなどは、自分のやりたいことを簡単な道具で、目的をかなえることはある。カラスは、固い殻でおおわれた果実を自動車がよく通る道路の上に置いて、車輪の重みでそれを潰して、目的を果たすというような知恵を働かすことがある。

しかし、人間ぐらい自分のやりたいことを、こと細かく、あらかじめ「案」を練り、それを実現する設計書（図）をつくることのできる動物は、存在しないであろう。

この人間なるものは、今から700万年ほどの昔、アフリカのある地で、チンパンジーのような類人猿から枝分かれをして、今日のホモサピエンスという段階まで進化をとげたものである。

いろいろな説があるが、とにかく、人間は猿や他の動物と違って、二足歩行ができるようになったことで、四足歩行のときに比べて、前足というか、

今日ではこれを「手」と呼んでいるが、その「手」を利用して、さまざまなものを工作し、働きかける条件をつくり出した。

二足歩行は、体のバランス上から、頭の部分が大きくなり、頭蓋容量が大きくなってきた。人間のみならず、他の動物も、それなりの判断というものは、この頭脳によって行っているのであるが、人間が他の動物、猿のような高等動物の中でも群を抜いて、「知的生命体」としての進化のコースをたどってきた。

人間の「手」というものが、人間生活にかかわる周囲のさまざまなものと、いろいろな関係性をとり結ぶようになると、自然界の成り立ちというものが、四足歩行のときよりも、いっそう深く把握できるようになってくる。「知的生命体」である人間の深化は、このようなことから、今日に至っているということである。

「知的生命体」ということになれば、人間同士のコンセンサスが濃密になってくる。「言葉」による表現が豊富にならざるをえない。「言葉」はやがて「概念」的表現のところまで突き進んでくる。「概念」と「概念」を結びつけて、より大きく、より広く複雑なことを、短い文言で表現できるようになる。これが、「概念」に対する「命題」といわれる論理学上の発展段階を示すものである。

人間のみならず、すべての地球上における、いな、太陽系など宇宙的規模における存在は、すべてことごとく、仏教がいうところの「縁」というものと関係なしには、その位置、位相を確保することはできない。

その「縁」(条件)なるものを、他の動物と違って、手でいじりながら、「縁」(条件的存在物)と「縁」との関係を分析する。そして、「言葉」があり「概念」があって論理を構築し、ついには「命題」という複雑なことを表現できるようになった。それと同じように、人間は、自然界の法則(進化の条件＝法則)を、次第に精密に知覚するようになってくる。

そもそも、ものごとを生産するということ自体が、「かくすれば、かくなる」という法則を知覚した上で、それを再演するということに他ならない。

人間が「知的生命体」と言われるのは、そのような生き物であるからである。

おもに農業生産で、人間は、それを体験することになる。生活物資が次第に豊富になってくると、ますますものを考える動物としての条件が整う。こうして、パスカルが言ったように、他の野獣に比べて、まことにか弱い生き物である「考える葦」である人類は、風の吹くままに吹かれつつ、自然に逆らわず「考える動物」として、700万年を生きてきたのである。ことにここ20～30万年の進化のペースは速かった。

さらに言うなら、人間は、生活条件の設計書(図)を頭に描いて、生産活

動に励むようになるばかりではなく、人間としての生き方（ありよう）のところまで考えるようになってきた。

おそらく２～３万年前から、簡単で粗略な宗教心のようなものが、人間世界に芽生えてきたのであろう。

現存する宗教は、どれも２～３千年の歴史しか確認できない。文字というものの創造は、その頃からのことであるが、簡単な宗教心は、それ以前から、人間の「ありよう」という設計書（図）として、人間の脳内に存在していたに違いない。

このように、人間は言葉を創造し、その都度言葉を変えて表現するようになり、さらに、理論的動物というものになるのである。

その人間の中でも、差別する側の人間は、周到な分裂支配という構図を描き、漁夫の利をむさぼってきたが、これに対する差別される側の解放運動も、その「知的水準」を上まわる理論をもって、対峙しようとしてきたのである。

「研究としての部落解放運動」というテーマで執筆するためには、人間なるものの成り立ちを理論的に分析することから始めなければならない。

先にも述べたように、人間は、「概念」と「概念」の結合によって「命題」の段階、つまり思想的水準に到達し、その水準の「知的活動」を駆使するようになる。運動は、実際行動（目の先のこと）に左右されずに、中期もしくは長期にわたる見通しを立てなければならないし、立てるようになる。しかし、論理が高遠すぎて運動から遊離した理論のように思われ、運動の実践家からは、空論として退けられるという場合も少なくない。

当面の闘いの方針については、つねに運動にとって目の前に展開される「諸現象」を「本質」にかえして分析し、中・長期を展望するものとしなければならないのである。

一例をあげてみよう。かつて朝田善之助委員長は、周囲の者がすぐには理解しにくいような理論を打ち出すことがあった。「部落（被差別部落のこと）に生起する一切の不利益は差別である」といった理論が、その例である。

日本共産党は、差別キャンペーンの中で、それみたことかとばかりに、「解放運動側は、なんでもかんでも、周辺に起きる現象をすべて差別と言っている」と非難して、一般市民と運動とを離反させる策を講じてきた。

しかし、考えてみればみるほど、この「部落に生起する一切の不利益は差別である」という「命題」は、意味が深いものである。被差別部落の学力構造が低水準にあるものを、一般世間は、部落の子は学力が低いから上級学校に進学できないのだと言っている。しかし、その学力の低さそのものが、じつは差別に由来していると考えなければならない。朝田委員長は、そこを

言っているのである。

理論は、場合によれば、運動と遊離した高遠なことを言い、観念のもて遊びのように思えることもある。しかし、その理論が、現実の諸現象を「本質」的に分析する基準となるのである。真の理論というのは、そういうものでなければならない。

また、「何もしないことは、それ自体が差別である」という「命題」が、部落解放運動の中で言われたことがある。これも、理論家・朝田委員長が言い出した言葉である。

これに対して、共産党は、「なんでもかんでも、言いがかりをつける」と攻撃してきた。

しかし、眼前で差別が具体的に行なわれているとき、それを傍観し、手をこまねていることは、差別者側に立っているということではないだろうか。

最近、そのことをつくづく思わせる事件があった、深夜、16歳の少女らが６～７人で、広島市の中心街から呉市の灰ケ峰に少女を連れて行き、殺害したという事件があった。本当に手を出した者は、全員ではなかったかもしれないが、現に殺害に至る程の暴行を手をこまねいて見ていたという事実があった。

これは、広島県の教育の「無力なる水準」を痛感させられた事件であった。もし同和教育が、県教育委員会の妨害を受けないで、かつての運動の隆盛な頃のように行われていれば、少女らは、「人権」「人命」の尊さという観念から、「手をこまねいて」見ていることはできなかったはずである。

「何もしないことは、殺人者に同調していることになる」ということを、この事件から知らなければならない。

このように考えてくると、「何もしないことは差別である」という「命題」は、運動の自分勝手な理屈のように聞こえるかもしれないが、歴史の現実から照射すれば、たしかに人間社会の「真理」＝「真実」を言い当てているということである。

人間社会の現段階に、宗教というものが、ある程度の影響力をもって大衆に浸透している。私は、宗教といっても、浄土真宗の親鸞思想を脳裏に描いて考えているのであるが、人間には、自己本位（エゴイズム）にしか、ものを考えようとしないところがある。親鸞は、これを「煩悩具足の凡夫」と表現している。そのような不安定な人間だからこそ、しっかり、内省・自省の心を養わねばならないというのが、親鸞の思想なのである。

親鸞の思想は、こんなに簡単に表現しきれるものではないが、とりあえず、ここでは、その内省・自省のことについてだけ指摘しておこう。

親鸞の「卯毛・羊毛のさきにゐるちりばかりもつくる罪の、宿業にあらずといふことなしとしるべし」(歎異抄) という思想は、人間の動きを、つねに「本質」にかえして洞察することが必要であることを教えているものであると、私は受け止めている。

「宿業論」ということになると、スペースの関係で、これに触れるわけにはいかない。

もう30年も前のことになるが、私は、『宿業論と精神主義』とか『業・宿業観の再生』という小著を世に問うている。

「宿業論」というものは、いずれにしても、深く「人間のありよう」を考えて、人びとをして、内省・自省の方向に向か合わせようとする哲理であり、理論である。

理論を重視しなければならないのは、ものごとの現象を、抽象化された「概念」と「命題」によって、一度は「普遍性」の次元にかえしてみるということである。

ヘーゲルは「本質は現象し、現象は本質的である」と言った。これは、後にエンゲルスなどのマルクス主義哲学によって引き継がれ、ものごとの「本質的分析」において役立ったものである。

もろもろの現象は、それぞれが偶然的、偶発的諸条件によって惹起しているという個別性はあるが、しかし、その個別性にだけ拘っていると、世の中の大きな流れを見失ってしまう。理論というものは、そこをコントロールし、「本質」を見誤らないようにしていくためのものである。

青年期に読んだ論文で、今も忘れがたい印象を脳内に収めている著書がある。それは、松村一人という当時でいえば、少壮哲学者であろうが、この人の『弁証法的唯物論のために』という標題の著書である。

私の頭に焼きついているのは、「理論は、たんなる理論であってはならない。理論は変革のためのものであって、明日からの実践の指針でなければならぬ」という言葉であった。

「変革のための論理」と言えば、当時の左翼活動が喜びそうな理論と思われたが、人間の今日までに進化してきた歴史の普遍性から言えば、人間は、「変革の連続」であったと言わねばならない。その「変革」のための指針として「理論を位置づける」ということは、きわめて大事なことであり、青年期の私も胸を躍らせたものであった。

私は、理論と実践は、大海を航海する船のエンジンと羅針盤の関係にあると、部落解放研究所の諸集会で、よく言ったものである。羅針盤がなければ、運動が、いまどの辺りを過ちなく航行しているのかが分からない。澄んだ夜

空を仰いで、北極星との関係においてのみ、これを知るという程度では、今日のようなスピード感の必要な運動の間尺には合わない。

そこで理論というものは、大局的にいま航行している方向に過ちはないかを推し測る高度に抽象化された理論であるとともに、明日からの実践、日々の行動指針となる理論として双方を満足させるものでなければならない、というところに到達する。

「研究としての部落解放運動」というテーマに対して、いまだからこそ言えることがある。

それは、日本共産党と部落解放運動との関係のことである。私は、今日でも基本的な過ちは共産党の側にあったと分析している。

そもそも共産党という看板をかけながら、400年の長きにわたって、支配階級の搾取のために餌食とされて、人権を侵害されて続けてきた被差別部落民の自主的運動に敵対するなどということが、あっていいものであろうか。それで喜ぶのは、支配階級だけである。

厚顔無恥な支配階級においてさえ、一歩一歩と、「市民的権利」の要求には譲歩せざるをえない状況にあったとき、共産党の行動は、まことに「勇気ある行動」と、極右の反動派までが、ひそかに手を叩いて喜んでいたものである。

今日、自民党が正面切って部落解放運動に敵対するようになり、それに引きずられた自治体もあるが、当初は、共産党の無鉄砲な論理だけが際立っていたのである。それだけに、共産党の差別キャンペーンは、「勇気ある行動」と彼らの間で評価されたわけである。

その差別キャンペーンなるものの縁由の第一義は、どこにあったのか。それは、共産党のセクト主義、独善性という他はないものであった。

1967～68年頃までは、広島県東部において、共産党と部落解放同盟の仲は、そんなに悪くなかった。共産党が、行政交渉などにも出てきて、援護射撃をしてくれたことを覚えている。

部落解放運動の大衆的次元の広がりが進み、「共産党が指導してやる」といった、「高見」に立った考え方が、とても通用しなくなってくると、共産党は、にわかに部落解放同盟批判の立場に転じるようになった。

『ドイツ・イデオロギー』(マルクス)の著作の中に、「いかなる時代も、その時代の主要なイデオロギーは支配階級のものである」とする有名な「命題」がある。どう考えてみても、部落解放同盟が「三つの命題」の「社会意識としての差別観念」で主張していることを、『ドイツ・イデオロギー』の理論からは批判できないはずである。にもかかわらず、共産党は、「社会意

識としての差別観念」の命題を、「部落民以外はすべて差別者だと言っている」とねつ造し、被差別部落民と労働者階級との間の離間策に打って出るという始末であった。

『ドイツ・イデオロギー』のこのくだりは、「いつの時代にも、社会意識として広く伝播している意識というものは、支配階級のものである」と言っており、マルクスは、さらにそこに、「支配階級は、社会における、そのときに必要なる物質を生産する手段をもっていると同時に、精神的なものも生産する手段ももっている」ということをつけ加えている。

この「命題」は、「社会意識としての差別観念」の存在を説明する、まことに好い材料として、人びとの理解を得るために存在していると思っていたが、共産党は、この古典が打ち出している「命題」をまったく逆の方向に使って、平然としていたのである。「血迷った」といっても、その「迷い」ようはひどかった。

他方で、われわれの方にも反省点はあるかと問われれば、私は「ある」と答えたい。運動が軌道に乗って、「同対審」答申の正当性を人びとが認めるようになってくると、全国津々浦々で、われわれの運動は広がりをもつようになってくる。

そのとき出てきたのが、「昨日まで盟友であった共産党を、少々のことはあっても、そんなに足蹴にする必要はなかったのでは」という反省である。

私自身にも反省点はある。共産党の「血迷い」が激しくなってきた頃、私もやはり、この政党の影響力を排除していかなければ、運動は前進しないと判断したのである。

広島県の部落解放運動の努力と、これに連帯する労働運動などの力を計算に入れれば、十分に共産党を排除することはできると判断したのである。

1969年12月14日、呉市民会館において、部落解放同盟広島県連再建大会を開催したのが、それである。

この大会の数日前に、私は朝田委員長に連絡をとった。その頃、中央本部は、大阪、京都、奈良などの近畿各府県において、共産党と鋭く対立していた。中央本部の力を広島県に注がねばならなくなると、全国情勢において、力のバランスが大きく崩れてくる。私は、朝田委員長に「広島県はわたしたちで十分に勝つ自信をもっているが、近畿各府県は大丈夫でしょうか」という意味のことを言った。朝田委員長からは、「広島県が単独でやり切れるなら、やってほしい」という答えが返ってきた。当時の闘いの状況を包み隠すことなく言えば、そういうことであった。

その頃、部落解放同盟広島県連の事務所は広島市にあったが、この事務所

で、『解放新聞中央版』は埃をかぶり、山積みにされていた。

部落解放同盟が「『赤旗』を読まなければ、解放運動は分からない」と、労組員に『赤旗』を売り捌くのが、運動の役割のようになっていた。それは、セクト主義の極みであった。

広島県の東部・南部、北部の運動家は、共産党のセクト主義を苦々しく思っていたから、再建大会の呼びかけに速やかに応じたということである。こうして1969年12月14日、呉市民会館は、満員の大衆によって埋めつくされたのである。

後に「全解連」となる共産党の解放運動は、広島市のどこかで数十人が集まって、われわれに敵対する姿勢を示した。

この頃、全国の運動は、矢田教育差別事件で、共産党から、「社会意識としての差別観念」を利用した激しい攻撃が仕掛けられ、結果からみれば、国民の意識・観念の間に流布された「差別観念」で、相当の打撃をわれわれは受けていたということである。

続いて、八鹿高校差別事件も、共産党から言えば、差別の社会意識を煽る格好の事件となった。

ここまで共産党を敵の手先に追いやることが必要であったのか、というのが今日の反省である。

私自身も、戸手商業高校事件で、暴力事件をデッチ上げられ、裁判所と闘った。罪名は、「暴力行為等処罰に関する法律」であったと思うが、とにかく悪名高い「治安維持法」ともたとえられるような法律であった。私は、それで罰金３万円の刑に処せられた。

これらの事件により、部落解放運動の評価と、被差別部落民の仲間に対する世間の差別意識がどのように広がっていったか、それが問題である。

いまは「全解連」も「差別はなくなった」として名称を変え、実質的に解散してしまった。彼らは、もともと自らの運動理念における勝利をめざしていなかった、ということである。

彼らは、「後は野となれ、山となれ」といった心境で、「憎さも憎し」の感情で、最大級に差別意識の伝播に努めたということである。

1969年から1990年代にかけて、共産党の「全解連」を看板とする運動が消えるまで、どれだけ大きな差別観念の流布があったことか。この被害の大きさが、われわれ、少なくとも私には、読み切れていなかった。

このような犠牲を省みることなく、ひたすら彼らの「排除」に努力を注ぎ、真に部落解放の勝ち取るべきものを勝ち取ることができなかった、というのが今日の反省である。「研究としての部落解放運動」のテーマは、ここにも

迫らなければならない。当時の部落解放運動を客観視することが、必要なのである。

そして、当時の部落解放運動と、その後の21世紀初頭からの部落解放の全国運動の停滞というか、その不甲斐なさとの関係を、冷静に分析することも必要なのである。

運動の停滞は、どこから始まったのか。私は当時、衆議院に議席をもっていた。法務委員会の筆頭理事でもあった。当選２回で筆頭理事というのは、幸運というべきことであった。私の所属する日本社会党は、勉強不足であった。大衆からも遊離していた。党本部の次元で言うと、自民党本部では、さまざまな研究会を擁していたが、社会党本部にはそれがなかった。たまたま、消費税に反対するということで、参議院選挙では土井たか子委員長率いる社会党が、ボロ勝ちをした。この得票結果をシュミレーションしてみれば、衆議院も小選挙区にしたとしても勝てると、マスコミは連日おだてるような記事を、新聞に書いた。その手にまんまと乗せられて、今日の小選挙区比例代表並立制が実現したというわけである。爾来、社会党は、ほとんどが民主党に吸収された格好となり、日本版NSCに賛成させられるハメとなっている。

理論の必要性ということでは、共産党の差別キャンペーンに関わって、当時の彼らの、とりわけ部落問題に対する理論水準の低さを考慮しなければならなかった。なにを受け流し、なにに正面から反撃すべきであったのか。われわれに、その分析ができる余裕（理論水準）がなかったために、10年、20年では拭い切れない「社会意識としての差別観念」の増幅を許してしまった。その上共産党も、本来の思想に戻ることのできない、再起不能なところまで堕落させてしまった。

この間の参議院選挙で少し議席増をしたことで、自共対立の構図だなどと、共産党中央は言っているが、地方は、差別キャンペーンの後遺症なのか、保守反動派と組むことを当然だと思うところまで、彼らの革新性が劣化してしまった。

そして、わが方の部落解放運動はと言えば、小選挙区制と運命をともにして、とても「部落解放基本法」制定とは、及びもつかない政治地図になったし、これを批判しきれないまま、そのときどきの政治と運動の局面を糊塗しながら、結果として、部落解放運動の放棄に等しい状況となってしまった。

県連大会に自民党を招かないのは、広島県連ぐらいのものである。他の府県連にあっては、心ある者が、われわれに時折、「家来に諭すような」自民党の祝辞を聞いて嘆くくらいのことである。

20～30年をサイクルに反省してみるとき、客観視できなかった当時の理

論により、取り返しのつかないことが、盟友であったもの同士の間に起きているのである。

共産党との対立がいよいよ激化しようとしているとき、府中市の同和問題実態調査に入っていた共産党の研究者である東上高志と馬原鉄男から、私に両組織の和解をとりもつようにとの要請があった。私はそれに同意しなかった。違った選択をしていたら、どうであっただろうか。「研究としての部落解放運動」を執筆するにあたって、あらためて自問しているところである。

（こもり・たつくに　部落解放同盟広島県連合会）